

2025年1月22日
株式会社講談社

十人の作家による能登半島応援企画 チャリティ小説『あえのがたり』刊行のお知らせ

平素より弊社の出版活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

昨年1月に発生した能登半島地震を受けて今村翔吾さん、小川哲さん、加藤シゲアキさんの呼びかけにより動き出した被災地支援を目的とするアンソロジー小説『あえのがたり』が、本日刊行されました。



小説を書き下ろしたのは、呼びかけ人の3名と朝井リョウさん、麻布競馬場さん、荒木あかねさん、今村昌弘さん、佐藤究さん、蟬谷めぐ実さん、柚木麻子さんの計10人。

表紙のアートワークは能登地域の伝統工芸「輪島塗」にインスピレーションを受け、加藤シゲアキさんが制作。輪島塗の「黒」「赤」「金」が混ざり合う印象的な絵は「アルコールインクアート」という手法によって描かれました。

また、YouTube (チャンネル [@KODANSHA Books&Comics](#)) にて『あえのがたり』ができるまでを追った「かたりごと-Document of あえのがたり-」(全8回予定)を配信。『なれのはて』直木賞選考会の裏側から、能登地域への取材、表紙制作、各作家インタビューをドキュメンタリーとしてお届けします。第1回の配信を22日、第2回を翌日の23日、第3回からは毎週水曜日の夕方ごろに配信いたします。

『あえのがたり』というタイトルも、能登地方に伝わる「田の神様」へ感謝をささげる伝統儀礼「あえのこと」から着想を得たもので、「あえ」とは「おもてなし」のこと。気鋭の作家たちの物語によるおもてなしをお楽しみください。

本書は、著者の印税相当額と講談社の売上利益を能登半島復興支援のために寄付します。

※次ページより各作家からのコメントと書誌情報が続きます



◆今村翔吾

一年の歳月が流れました。しかし、まだ何も終わっておらず、まだ何も始まっていません。そのような中でも、決して負けない心を持って、明日を見据えて生きている人たちへ。このちっぽけな本を贈ります。この想いが、この願いが、この禱りが、少しでもその明日を彩ることを信じて。

◆小川哲

小説家の仕事の一つは、弱者や困窮した人に寄り添い、生きるための勇気を与えることだと思います。とはいえ、運悪く大きな災害に遭い、途方に暮れてしまった人に対して小説家ができることは限られています。今回は、チャリティという形で、自分たちにできることをしようと決めました。僕たち小説家にとっては作品を描くことで、そして読者の皆さんにとっては本を買うことで、被災された方々への一つの支援の形になると 생각합니다。

◆加藤シゲアキ

2024年の元日に起きた地震に砕かれた人々の心を、どうすれば取り戻せるのか。

そのためにお前はなにができるのか。

試されている気がしました。

小説でできることなど、それほど多くないかもしれない。

けれど、小説にしかできないことがあるかもしれない。

そしてこの企画を起案しました。

私の思いに共鳴してくれた作家の方々に改めて感謝申し上げます。

収録された10編の物語が小さな灯火となって、固まったものを溶かし、温めることを願っています。



**◆朝井リョウ**

私は天邪鬼な人間で、「これがあなたへの“おもてなし”です！」と両手を広げられたところで拒絶してしまいたくなる傾向があります。きっとこの本の周辺にも、いま小説を差し出されても、と感じている方は少なくないのではと察します。特に被災された方々はそうかもしれません。その中でどんな小説を書こうかと考えたとき、おもてなしという一見ポジティブな連帯から零れ落ちる部分にそのまま光を当てたいと思いました。私は小説を通してポジティブな感情を呼び起こすことが得意ではないのですが、それは読み手に回るときも同じです。今回書いた作品から、こういう感情や現象がある、という点で一種の安らぎを受け取ってくれる読者がいることを願います。この本を通して少しでも多くの寄付ができますようにと祈っています。

◆麻布競馬場

去年の夏、初めて直木賞の待ち会を開催しました。青山にある馴染みのワインバーを貸し切りにして、友達を片っ端から呼んで、ワインボトルが20本空いて……。おもてなしって楽しいけど大変で、いろんな企みに満ちている。そんな経験をもとに書いてみました。

一冊の本で世界は変えられないけど、何かを思い出したり、誰かのことを思ったりするきっかけにはなり得る。それぞれの大変な生活の中に、ちょっとだけ温かいものを残せたら嬉しいです。

◆荒木あかね

能登半島地震の話題が日ごとに減っていくなか、作家としてできることをしたいという思いで企画に参加しました。『あえのがたり』のテーマは「おもてなし」ですが、これまでイメージされてきた「おもてなし」という言葉からは想像もつかないような、ユニークで豊かで多様な物語が詰まっています。十者十様の「おもてなし」をお楽しみください。そして物語を楽しみながら、その先にある被災地に目を向けていただければと思います。

◆今村昌弘

1995年の阪神・淡路大震災が起きた時、僕は神戸にいました。山の上に住んでいたため大きな被害は免れましたが、地元の町や人の受けた傷と生活とが切り離せるはずもなく、小学生だった自分はただ時の流れを見守るばかりでした。今は自分の物語が少しでも支援になることに縁を感じます。この本から新たな縁が生まれますよう。

◆佐藤究

企画への参加を呼びかけられたとき、私の頭をよぎったのは30年前にリリースされた音楽アルバムでした。1995年の「ヘルプ」。ボスニア戦災孤児のためのチャリティで、オアシス、ブラー、レディオヘッド、様々なアーティストがスタジオで曲を録音し、ポール・マッカートニーもキーボードを弾いていました。あのアルバムを聴いていた十代の頃を思いだしつつ、今の自分にできる仕事で『あえのがたり』に参加しようと決めました。



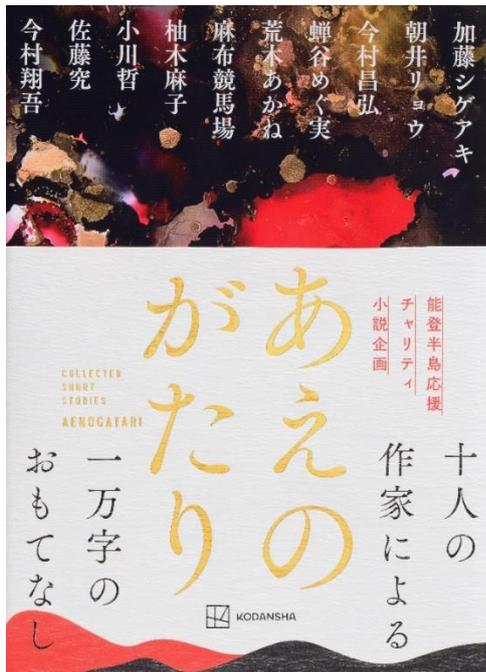
◆蟬谷めぐ実

能登の地震がおこって一年、被災された方々が前を向いて進まれているおかげで、人々の記憶から地震の記憶が少しずつ薄れているように思います。それは多分幸せなことで、でも忘れてはいけないことだってある。だからこそ、記録として残す、本の形で残すことこそ作家としてできることなのではと考えました。読者の皆さまには作品を読んで楽しんで、そして能登の地へ思いを馳せていただけたのなら幸いです。

◆柚木麻子

被災地で暮らす皆様、そして被災した方々に心を寄せる皆様。この短編集がちょっとでも暮らしの空気を循環させることができたら幸いです。このような企画に参加できたことを光栄に思います。

【書誌情報】



◆タイトル『あえのがたり』

◆著者名 今村翔吾／小川哲／加藤シゲアキ

朝井リョウ／麻布競馬場／荒木あかね／今村昌弘／佐藤究／蟬谷めぐ実／柚木麻子

◆発売日 2025年1月22日（水）

◆判型 四六判ワイド上製

◆定価／ページ数 2200円（税込）224ページ